

# かいたく

教会のない地域に教会を 刈り入れ場に働き人を



カンファレンスで特別讃美をする名古屋教会とその伝道所の伝道師たち

「神のことに混ぜ物をしない」

説教者には二つのタイプがあると思います。一つは聖句を引用するのですが、聖書の語らんとするところではなく、それを利用して自分の語りたい事を、多くの例え話、自分の証しを交えて語る説教です。その場合、すべてとは言いませんが、人間のレベルに御言葉を引き下げ、人に合せる危惧があります。もう一つは、聖書全体の思想を前提とし、その文脈の中で捉え、時代背景を理解し、その時代に語られたメッセージを現代に適用する説教です。後者は会衆を聖書のレベルに引き上げ、神中心の信仰者を生み育てる事になります。聖書を純粹に語る事は聖書そのものが主張しています。(申命記四章三節、第二コリント二章十七節)

私達説教者の使命は聖書を人間のレベルに引き下げて人間中心の信仰者ではなく、神の言葉そのものを、「混ぜ物をせず」純粹に語り神のレベルに引き上げ、神中心の信仰者を生み育てる事にあるのではないのでしょうか。

年頭の宣教カンファレンスにおいて、川島師より「たましいに響く説教」というテーマで、会衆の魂に届く説教のあり方について語って頂きました。私ごときがえて申し上げる事はありませんが、僭越ながら私の願い目指す所を述べさせて頂きました。

国内宣教委員長・高田 稔



# こころに響く説教

講師・川島真理師

今回は、常々感じている三つの点をお話させていただきます。今回の中心聖句は使徒の働き二章三十七節です。

**人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに「兄弟たち。私たちはどうしたらよいでしょうか」と言った。**

## 第一集会・知の論理と情感の論理が重なって

この中に、今回のテーマに関して参考になることがずばりにあります。それは、①「これ」を聞き何かを理解した。②聞いた人々は「心を刺された」③自分が何をしたら良いのかを尋ねた三つです。

普通の人が心に何か響く順路とは、頭で理解し、心で何かを感じるというものです。一回一回の説教がそこにいる人々に届いていくには この簡単な経路が必要です。

第一コリント十四章七〜九節でパウロは、明瞭なことを語るのだから理解してもらえないと言っています。どんなに優秀な説教者の説教でも、音声が聞くことができなければ届き

ませんし、言語が分からなければ理解することはできません。また、同じ日本語でも説教者が伝えたいことが伝わっているかと言うと、伝えたと聞いた側が違う理解をするという行き違いもあります。伝えたと聞いて

いるほどには理解されていません。説教者は、祈り準備した説教は伝わっているはずだと思つて結果を期待しますが、そこに大きなずれがあるということも承知しておかなければなりません。これは説教の特異性と言つてもよいでしょう。神様が説教者を用いて、ご自身の御言葉を語りかけられるのですから、そこには聖霊の働きがなされているわけです。ですから説教で手

を抜くことは恐ろしいことと、厳肅にこの働きの重みを受け止め、力を尽くして当たらなければなりません。学術論文や研究発表とは訳が違います。私たちはこういうたぐいのものを担わされているのです。心に響くところまでいなくても、用意したメッセージが理解してもらえないところを目標にしなければなりません。これがなければ何も始まらないのです。聞いても理解していなくてはどうして心が刺されますか。どうして感動しますか。人間というものには理解して感じるものなのです。しかし、実際に人々に届かない場合もあるわけで、その原因を探り、考えていただけたらと思います。

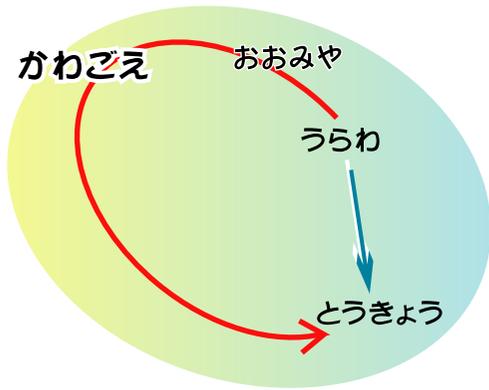
話した内容が理解されるためには、はっきりした音、明瞭なことばだけではなく、誰もが話し筋道を理解できる、単純で明解な論理がなされていなければなりません。これは説教者が意外と取り組んでいない点だと感じます。

たとえば、私の住んでいる浦



2013年 国内宣教カンファレンス

1月4日・5日



和から東京へ行くとしましょう。普通は京浜東北線一本で約三十分、または宇都宮線か高崎線で上野で乗り換えて東京駅というルートが利用されます。ところが、「私はどうしても川越を経由して行きたい」という人がいたら、その人は何回も乗り換え、遠回りをし、余分な電車賃を払わなければいけません。その人は自分では納得するでしょう。しかし、他の人から言わせると理解できない行動です。同じように説教において単純明解なもの、聞く側もわかり易いもの、説教の中で、どうしても「川越」に寄ることにこだわ

説教は、説教者にとっては満足するものかもしれませんが、聞く側は理解できません。そうした説教者特有の論理が、聴衆の理解の妨げになっていくことが現実には多いのです。説教の結論だけ分かってても何の意味もありません。自己流を壊して、誰もが納得できるメッセージの構成に意識的に取り組んでいかなければなりません。

では、一般的で単純明解な論理とはどういうものなのでしょう。か。

「説教者は一人の良識人であれ」と言われますが、自分の考え方、感じ方を横に置いていかなければいけません。説教者自身の持ち味や個性が強く出る時には、説教が人間的になり自己主張の強いものとなってしまいます。説教は説教者の怒りや憂さ晴らしの場となつてはいけません。個性をなくしてはなりません。聖められなければならぬのです。これは説教者には苦しいことですが、聖められた個性が生かされる時に兄弟姉妹の信仰を励まし、徳を高

めるといふ形で現れてきます。

また、論理とは理知的なことを考えますが、人間の情感にも論理があります。心に響いて初めて聴衆に、「どうしたらいいのか」という思いが出てきます。そして神様の前にどう歩むべきかという自分の課題が分かってくるのです。ところが、説教の内容に気持ちがついていかないという声を聞くことがあります。御言葉に従えないクリスチャンが多いのです。これは情感の論理の失敗です。

聖霊が働くためには説教者は

## 第二集会・聖書積義と説教の関わり

説教とは、聖書の御言葉を話すことです。聖書積義のな説教はありえません。説教者は、キリスト教的なものを伝えるのではなく、御言葉そのものを伝える、そういう責任を負わせられている者です。聖書を積義し、その積義から説教するという形を崩してはならないのです。では、説教のための積義とは、いかなるものかということを考えていきたいと思います。

何をしなければならぬのでしょうか。知の論理と情感の論理が重なって一つになった時、説教は用いられます。説教が理解でき、心が反応する。これが教会の説教でなされた時に、教会に動きが出てくるのです。一番いけないのは両方がめちゃくちゃな場合です。

論理とは単に知的ということだけではないという面を覚えながら、一般的で単純明解な論理を目指して取り組んでいただく、これからの説教に役立てていただけたらと思います。

心に響く説教という点では、聖書積義を考えることは重要なことではないかと思えます。しかし、聖書講解のための積義と説教のための積義は違います。聖書講解のための積義とは、御言葉全体に触れなければなりません。注解書は、そういうふうに書かれています。ところが、注解書をそのまま持つてきて聞く人の心には、何も残らないものです。それは、説教には有

効とは言えません。すべての聖句を釈義することは、説教の下準備でやることであって、この下準備をやっている中から聖霊の導きによって一つのこと、これを教会の兄弟姉妹たちに伝えたいという思いが与えられるはずで、これを語らなくてはならないのです。そして一節一節を吟味するこの下準備こそが、祈りなのです。これが説教者の神様の前に大切な働きの一つだと言わなければなりません。全てを話すと逆に伝わらないのです。準備の中からメッセージに必要なものを抽出することが大事であり、テーマは一つ、語るべきことは一つです。それは心に響く説教を届けるためです。これだと言うところをライトアップすると人はそこを見ます。裏を返せば、メッセージに関係のない聖句、語句、思想をそのままその場に置いておかなければならないということです。そうすれば聞いている側は、すっきりと頭を整理されて、一つだけ心が届くということになります。

聖書の中にはあらゆる神様の恵みが満ちています。そこから御言葉を取り出し、作りあげていくことが説教です。それはあたたかも何でも収穫できる畑のようです。しかし、料理をするとき、その畑からは必要な野菜や穀物だけを収穫して使います。何でも収穫できるからと言って、畑にあるものを何でも採って来ては、メニューに合わないものや美味しくないものができあがり、あまりにも多くのものを食べたことにより何を食べたのか忘れてしまいます。これと同じことを説教でやってしまうのです。必要なものを抽出する、その作業が説教のための釈義と理

### 第二集会・こころ動かし悔い改めと信仰に進ませる説教

ルカの福音書十章に良きサマリヤ人の例え話がありますが、その前後にこの例え話がなされた理由が示されています。律法学者とのやりとりの中でイエス様は何とかして彼に隣人愛を実行させようとしているのです。しかし、律法学者はそれを実行することを避け、しかも

解していただきたいのです。聖書講解のための釈義と説教のための釈義の違いを理解していただくでしょうか。一回にたくさんの方を話して何も頭に残らないよりも、一回のメッセージで一つのものを残していかなければなりません。その積み重ねが、説教を通して兄弟姉妹たちが何かを自分のものにしていき、蓄積されて、成長してゆくと思えます。だから、説教者は長い時間をかけて確実に一つのものをしていくのです。それでこそメッセージが生きたものになっていくのではないかと思います。

正当な答えをもって、「では自分の隣人とは誰ですか」と逆に問い返しているのです。また「隣人になったのは誰か」というイエス様の問いに、彼はユダヤ人であるが故にそれがサマリヤ人とは認めるわけにはいかなかったのです。彼の答えは、「それは隣れみをかけてやった人で



食事の時の一コマ

す」でした。間違えではありませんが逃げがあります。イエス様の言葉を真正面から受け止めず、巧みに避けているのです。そうすることで実行せずに自分を正しい位置に保とうとする、これが律法学者の姿です。それと同じ姿がクリスチャンの中にも見られるのではないのでしょうか。聖書の言っていることはわかっているが、様々な理由でそれを実行しない、できない。こういうところに現実のクリスチ

ヤンの姿があると感じます。そして、そういう状況の中で、今日の説教の課題が見えてくるのではないのでしょうか。

説教の役割は、教えると同時に御言葉を実践し、御言葉によって生きるクリスチャンを生み出していくことです。ただ教えるだけであれば、説教の役割の半分も果たしていません。それは学びであって、説教と言ってはいけないのかもしれない。

さて、話を律法学者に戻しますが、イエス様は、「隣人愛を行えば永遠の命が与えられる」と、信仰による救いではなく行いによる救いを語られました。それは、明らかに聖書の教えとは異なることです。なぜイエス様はそのようなことを言われたのでしょうか。そこにはイエス様の意図したことがあります。イエス様はこの律法学者を新しく生まれ変わらせようとされているのです。救い主であるイエス様は単に聖書を戒めとしてとらえ、その戒めを実行しようというような人を作ろうとはしていません。

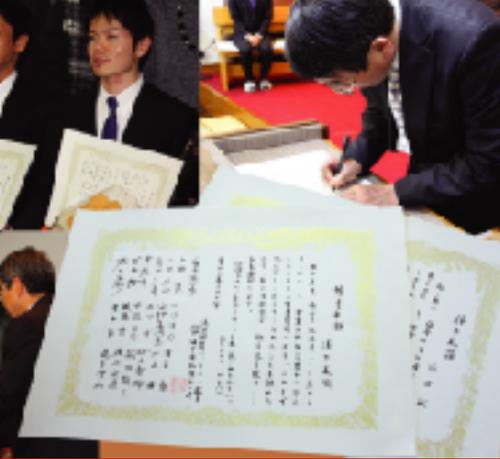
人を本当に救おうとしていらつしやるのです。ここに救い主の姿が表されています。

この良きサマリヤ人の話は、隣人愛を実践していく教えであると捉えられることが多くありますが、実はそれだけではありません。もしそうだとしたらそこには福音はありません。イエス様が律法学者に本当に伝えたかったのは、「本当に隣人を自分のように愛そうとする時、それを実行することができない自分を知ることができ、そこからあなたがわかってきます。そしてあなたに一番必要な命が与えられるその道に踏み出すことになりますよ。」と言うことです。しかし、あえてそれを隠して、「実行しなさい。そうすれば命が与えられます。」と言われたのです。それは、律法学者がその戒めを実践していくときに、自分分かなければいけないことだったからです。もし彼が本気で実践しようとしたら、そうできない自分にぶつかると。そこに自分中心で自分の利益しか優先しない生まれながらの罪

人の姿を見るのです。守れるか守れないかが問われているのではなく、守れない自分がいると言うことをイエス様は知ってほしかったのです。

説教において、実はこういうことが起こってこなければいけないのです。人は自分の罪を示され、それに気が付いて悔い改め、そうすることで初めて生まれ変わっていくのです。少しばかり人間が変わったからと言って救われる訳ではありません。悔い改めと信仰がなければ人は救われません。そして、人をそこに至らせる働きの説教にはあるのです。今日の説教が力を失っているのは、まさにこの点にあるのではないのでしょうか。第一ペテロ一章に、「あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることはない、神のことばによるのです。」とあります。この御言葉の視点に立つて一回一回の説教に取り組んでいくことが必要なのではないのでしょうか。





2月11日に  
多くの牧師たちが  
祝福のために集まって  
授けられました！

このたび授け礼を受けさせていただきました、清水聖書バプテスト教会長泉伝道所専従者の道下義嗣です。教会に衝撃が走り、急遽長泉に派遣された私たち家族にとって、主の恵みは十分である中に、さらに授け礼を受けるようにとの牧師の計画を知らされ、初めのうちは素直に受け止められませんでした。それでも祈り、教会の現状を考えて行く時に、この恵みも今必要だと考えを変えることができました。準備会が4回持たれ、改めて聖書の何を信じているのが、何をポイントとして説明すれば良いのか、また信じている事をどう表現すれば良いのかなど、勉強させていただきました。毎回違う答えを用意していく私に、3人の指導の先生方は大丈夫だろうかと戸惑われたと思います。当日三日前まで、しっかり準備しているかどうか確認の連絡を頂いてしまうほど心配されました。それでも、よりよい答えを模索し、十分でないながらも、信じることを述べる聖句を見つけ、みことばの剣を身にまとい、戦う準備が整えられたと思います。当日、イエス様を模範とし、しもべとして忠実に仕えておられる多くの先生方が、温かく見守ってください、また熱く祈って授けを授けてください、私もこの道を走り通したいと胸を熱くさせられました。主の恵みに感謝します。

これからについては、伝道所の継続と5年後を見据えた動きとに取り組みたいと思います。20代でも通ると言われますが、心身ともに弱く、無理をせず主にお仕えしたいのが本音で、40歳を前に何を言うかと怒られそうです。主に何でも祈り求めて、力と知恵を得ます。妻と子供二人も家族として、よくついてきてくれています。父親として、主にお仕えする素晴らしさをいつも教えるようにします。主が与えてくださった霊の賜物を確信し、十分に用いる事ができるように、臆することなく、愛と慎みを持ってチャレンジしていきます。長泉の伝道所は一から始められたわけではなく、14年の歳月を経た伝道所を引き継ぎました。私たち家族は1年生ですが、伝道所は15年目です。さらに5年足せば、20年になります。教会も伝道者も、希望を見つめ、走り疲れず、歩みて倦まず、鷲のように信仰の高嶺にのぼります。引き続き、熱いお祈りとお交わりをよろしく願います。

道下 義嗣



## 清水聖書バプテスト教会 二人の伝道師の 按手礼式とその恵み

「そして、彼を外に連れ出して仰せられた。『さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。』さらに仰せられた。『あなたの子孫はこのようになる。』」（創世記15:5）

素晴らしい主の御名を賛美致します。按手礼における主のお導きを感謝致します。また、今回の按手礼式にお越しくださいました先生方や兄弟姉妹に心よりの感謝を申し上げます。

予備諮問を導いて下さいました先生方の丁寧なご指導を通して御言葉の御教えを確認し、また、多くの祈りを通して励まされ、按手礼当日を迎えることが許されました。与えられた学びの機会を通し、聖書が明示する福音の豊かさや救いの確かさを今一度確認し、心に刻むことが許されましたことが何よりも大きな恵みでした。今後もお、主の御手の内にあって支えられ、揺り動かされない御言葉の基盤に立ちつつ、福音を福音として語り伝えるという幸いな務めを全うすることができますようお祈り覚えて頂けましたら幸いです。

本諮問最後の質問として「今後の抱負・研鑽について述べてください」という質問を受け、神学校入学当初より関心を持ってきた信仰継承というテーマに関する思いを短くお話させて頂きました。途切れてはならない恵みである福音の恵みが次の代に、さらにその次の代に正しく、また恵み豊かに継承されていくために何を考え、何を実践していくことができるのかということについて、その必要性を痛感しつつ、強い関心を抱いております。未熟な者ですので、まずは自分自身の内に、確かな聖書の理解が構築されていく必要性を覚えています。そのための学びを今後も継続していきたいと思っております。守り、語り継いでいくべき教えを何らかの形で明文化していくということをも大切な課題であると捉えています。また信仰継承が豊かに営まれていく場を教会に設けていく必要性を覚えています。キリストを中心に、人格的な関わりの中で、信仰が継承されていくために、主の御前に静まって耳を傾け、主から知恵とビジョンを示されながら歩んでいきたいと思っております。

浜田 献

# 「聖徒たちをささえる交わりの恵み」 国内宣教委員会 会計担当 三谷浩司

私はあかします。彼らは自ら進んで、力に応じ、いや力以上にささげ、聖徒たちをささえる交わりの恵みにあずかりたいと、熱心に私たちに願ったのです。  
(コリント人への手紙第2章3-4節)

「JBBF 宣教ハンドブック」によりますと、1988年頃に宣教委員会の中で国内開拓支援会が発足、1991年の総会で宣教委員会から国内宣教部門が分離して国内宣教委員会として独自に活動することになり、宣教基金から200万円が分配されたとあります。

それから20年以上が経ちましたが、国内宣教委員会を通じての国内開拓支援の働きが継続かつ拡大されて来ましたことは、ただ主の恵みとJBBF 諸教会のみなさまのご理解とご支援の賜物以外の何物でもありません。本当に感謝しております。

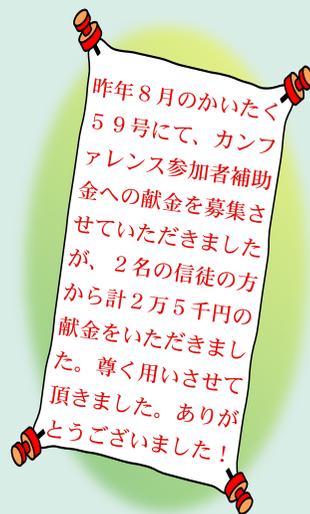
現在では国内宣教基金も500万円（貸出分含む）を超え、これまでに十数の教会・伝道所に会堂費用（購入・増築・移転）、開拓伝道開始費用、教会車購入費用等に100円を上限に無利息で貸出させていただいております。

また一般会計も30数教会から年150万円近くささげられており、毎年始めの国内宣教カンファランスの開催費用（宿泊費・交通費補助）を始めとして、年3回の健康保険料補助、年末のクリスマス献金（家族指定）、開所・独立祝い、特伝講師交通費支援、トラクト代支援等に大いに用いられています。毎年ほぼ使い切りの自転車操業状態ですが、それだけ多くの必要があるということで、委員会としては本望だと喜んでおります。

これからも日本の開拓伝道の前進と発展のために、「聖徒たちをささえる交わりの恵み」である国内開拓支援にJBBF 諸教会のみなさまが豊かにあずかられて、ともに魂の収穫の喜びを分かち合っていたいただきたいと心より願っております。

## ● JBBF 国内宣教委員会会計状況（2012年度）

・一般会計収入額（35教会+集会、個人献金+利息）	1,443,074円
・一般会計支出額	1,320,805円
内訳）かいたく発行費（2回）	87,730円
国内宣教カンファランス	189,309円
健康保険補助（8件）	672,000円
クリスマス家族指定献金（10件）	100,000円
特伝補助（講師交通費1件、トラクト代1件）	40,000円
委員会議費・交通費	131,653円
慶弔費（開所祝い2件他）	50,603円
事務費	49,510円
・基金会計収入	140,000円
献金（2教会）	140,000円
返済金	1,280,000円
・基金会計支出（カンファランス費用）	120,000円
・基金会計残高	2,378,890円
・基金貸出残高（7教会）	2,905,000円



## 編集後記

今回は、今年一月に行われた国内宣教カンファレンスの様子を中心にお届け致しました。カンファレンスのテーマが、「たましいに響く説教」でしたので、紙面の内容が牧師たちの説教への言及になりました。

読者の皆様に、くれぐれもお願いしたいことは、このことを材料に、あなたの牧師の説教を批判しないでいただきたいことです。

説教者たちは、自分自身の不足を覚え、神様の御言葉を忠実に正しくお伝えしなければいけないという重責の中で、苦悩しながら、神様の憐れみをいただいて毎週の説教を準備しています。そんな説教者たちが成長するためには日々の学びと祈りが必要ですが、聞く側の姿勢と成長も必要です。どうか、ぜひ毎日曜日、御言葉への飢え乾きを持って教会へ足を運んでいただきたいと願います。（榎本）

## 献金振込先（郵便振込）

00140・2・654375

JBBF 国内宣教委員会